

連載：「世界における非核・脱原発への挑戦⑩」

ドイツ歴史博物館における反原子力運動 — 展示「自然とドイツの歴史」によせて —

佐藤温子（青山学院大学准教授）

ドイツの首都ベルリンに位置し、世界最大級の歴史博物館の一つに数えられるドイツ歴史博物館で、「自然とドイツの歴史(Natur und Deutsche Geschichte)」という展示が2025年11月14日から2026年6月7日まで催されている(写真1)。その中に反原子力運動に関する展示も一角を占め(写真2参照)、ドイツにおける反原子力運動の公的な位置づけの一端を看取する機会であると思われるので、本稿で記したい。



(写真1) ドイツ歴史博物館の展示「自然とドイツの歴史」ページ

* * * *

ドイツの脱原発とその関連展示

2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所事故(以下、福島原発事故)から今年で約15年が経過した。その間に日本とドイツは異なる原子力政策を進めたように見える。日本では一度は全原発が停止されたものの、その後再稼働が進み、東京電力の柏崎刈羽原発(新潟県)6号機の再稼働が地元自治体に容認されたことで、本稿執筆段階の現在(2026年4月中旬)、稼働中の原発は全国で15基となった。一方でドイツは福島原発事故前には全土で17基あった原発を順次閉鎖し、2023年4月に最後の原発3基を閉鎖したⁱ。もちろんそれで全て終了したという訳ではなく、原子力利用に伴って産出される放射性廃棄物の処理問題等が残されており、また今後再稼働への道が再び開かれる可能性も完全に否定できないが、ひとまず、ドイツにおける商業用原発の稼働の歴史はいったん幕を閉じたといえる。

EUにおいて原発は二酸化炭素を発電時に排出しないことから「グリーンエネルギー」と位置付けられており、2022年に開始されたウクライナ戦争を受けて石油やガスなどの化石燃料への依存が見直され、原子力推進に舵を切る国の方が目立つようだ。その中でドイツは真逆の方向性に進んだともいえよう。

さて、ドイツ歴史博物館の展示の話に戻りたい。この展示は、12世紀まで遡って自然と人間のありようを表し、中世を経て、最後に1970年代に浮上したヴィール原発建設計画への反対運動で終わる

* * * *

という形で構成されている。ここで、当該の反対運動について概要を述べよう。1973年6月、ドイツ南西部に位置するバーデン・ヴュルテンベルク州の一地域ヴィールが新しい原発立地として決定されると、地元住民を中心に反対運動が巻き起こった。原発による自然への悪影響により農業や漁業といった自然環境と直結する生活の基盤が脅かされると感じたワイン農家と漁師やその他のグルー

(写真2) ヴィール原発反対運動に関する展示。



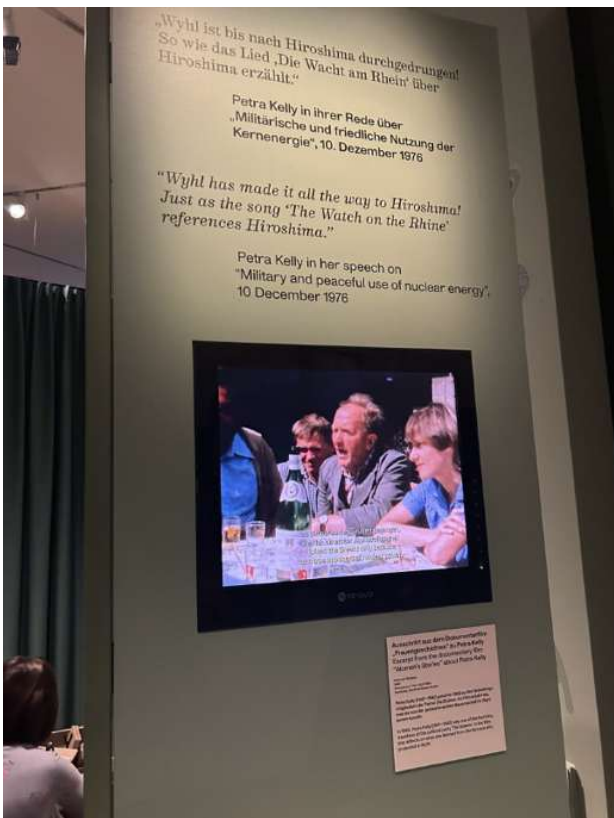
筆者撮影(2026年3月8日 ドイツ歴史博物館)

プが反対運動の担い手となった。数多くの議論と法的プロセスの後、1983年12月に建設計画は延期が決まり、後に断念されたⁱⁱ。

ドイツ緑の党の今昔

さらに、この反原子力運動のコーナーには、反原子力運動も含めて平和運動、女性運動等さまざまな運動の担い手が寄り集まって1980年に設立した政党「緑の党」ⁱⁱⁱの設立メンバーの一人であるペトラ・ケリー（1947-1992）の展示も見られる（写真3）。ケリーが、1976年12月にヴィールにおいて「原子力の軍事利用と平和利用」と題する講演を行ったことが紹介されている。ケリーは、核兵器と原子力施設両方に対して警告を発していた。また、彼女は、ドイツの政治週刊誌『シュピーゲル』（1982年24号）のインタビューの中で、緑の党を「反政党的政党」であり、「議会における根本的な野党」と表した^{iv}。

（写真3）ペトラ・ケリーに関する展示



筆者撮影（2026年3月8日 ドイツ歴史博物館）

近年の話を見ると、「反政党的政党」であった緑の党は1998年にドイツ連邦政権において与党の一角を占めるようになり（途中約16年の下野期間を経て）、2023年には多数の世論に反対する形で（！）、国内最後の原発閉鎖に関わった。ウクライナ戦争の後で、それまでロシアにエネルギー源を多く依存していたドイツでは電力の安定供給への不安が

高まっており、世論調査では原子力回帰の傾向が認められていたのだ。それでもドイツが全原発を閉鎖したのは、当時政権に参加していた緑の党の力が大きかったといわれる。

さらに直近のドイツの状況を知るため、地方選挙に目を移してみよう。2026年3月8日（日）に行われたバーデン=ヴュルテンベルク州議会選挙では、緑の党が30.2%の得票率で、現連邦首相の所属政党であるキリスト教民主同盟（CDU）の29.7%を上回り、議席数が最多となった。

両政党に関する世論調査を比較すると、環境・気候政策において緑の党は48ポイントを獲得し、CDUの12ポイントを大きく引き離している。環境政党といわれる緑の党のアイデンティティは相変わらず健在のようだ。とはいえ、今回の投票を決定する際の重要なテーマは、上から順に「経済」、「社会的安全性」、「環境、気候」だという。今回の選挙では、環境問題に限らず、緑の党の州首相候補者らの政治家としての能力が評価されたとみられている^v。

こうした状況を鑑みると、ドイツ国内の原発は全て閉鎖され、そして緑の党はドイツ政治の中で「成功」したといえるかもしれない。ケリーは満足しているだろうか。いや、後に残された放射性廃棄物や、ドイツ以外の国の原子力推進を見れば、きっとまだ自身が為すべきことを見つけているだろう。そしてウクライナ戦争が継続し、イラン情勢が緊迫化する中で変化しつつあるドイツを見て、黙ってられないに違いない。

【注】

- ⁱ ただし、研究炉は対象外である。
- ⁱⁱ Voss, Julia und Gross, Raphael (Hg.) (2025), Natur und Deutsche Geschichte: Im Spannungsfeld von Glaube, Biologie und Macht, Matthes & Seitz Berlin.
- ⁱⁱⁱ 直訳は「緑の人びと」（Die Grünen）。東西ドイツ統一後に、東側の政党と合併して正式名称は「同盟90/緑の人びと（Bündnis90 /Die Grünen）」となるが、本稿では便宜上「緑の党」とする。
- ^{iv} „»Wir sind die Antipartei-Partei« Petra Kelly über die politische Strategie der Grünen“, in: Der Spiegel, 24/1982. <https://www.spiegel.de/politik/wir-sind-die-antipartei-partei-a-8dc0fd34-0002-0001-0000-000014341522>
- ^v tagesschau, „Landtagswahl Baden-Württemberg 2026: Was waren die Hauptgründe für das Wahlergebnis?“ Stand: 09.03.2026. <https://www.tagesschau.de/wahl/archiv/2026-03-08-LT-DE-BW/umfrage-aktuellethemen.shtml>